

食器洗い主夫の「つぶやき」

ツイッター

新井 宏

近頃、妻の体調やコロナ禍の影響で、食器洗い、ごみ出し、買い出し、そして時には、掃除・洗濯も担当している。いわば全て家事単純作業で、慣れない「買い出し」も散歩の合間に「指示書」にしたがってスーパーを巡回して揃えるだけなので簡単である。

単純作業中は、頭の中は無負荷状態なので、素晴らしい「ひらめき」が生じる。いずれも夢の中の「大発見」と同じで、ちよつと経つともう思い出せないような「愛のないこと」が多い。しかし『まんじ』の題材にはなりそうなものもあるのでメモして置いた。

そして、いざ選ぶ段階になると、どれも単独では物足りない。それならいつもの流儀で「合わせ技」で一本にしよう。かくして「つぶやき(ツイッター)」としゃれてみる。もつとも「ツイッター」には文字数制限があるようだが、御容赦を。

糖尿病内服薬オングリザ

もう四年近く前のこと、妻がいよいよ白内障の手術をするというので、私も世話になった渕野辺病院の眼科で準備を進めていた。そして手術前の検診で「大事件」がおきた。血液検査の結果、血糖値の指標A1Cが一三・三でとても手術などできる状況ではないというのである。私は若い頃から血糖値が高めで、節食および万歩計と格闘しながら、何とか健康を維持していた。それでも、インプラント実施の際、たまたまA1C値が八・三と出て、とても抜歯など出来ないと思いの歯科医から宣告されてしまった。A1C値の判定表をみると、記載値が最大一三までで、対応する血糖値が三五〇と出ている。通常これ以上悪い数値はないということである。A1C 〓

八・三の場合、対応する血糖値が一九〇である。

A・I・Cが八・三と出た時でさえも一騒動であった。歯科医に対して、インシュリンの使用なしで何とか七以下にこぎつけた。歯科医は「そんな馬鹿な」と怪訝な顔をしていた。それほどA・I・Cの値を下げるのは難しいとのことであるが、その経過については、『まんじ』128号(2013年)に誇らしげに「ヘモグロビンA・I・C」として披露したことがある。

測野辺病院から北里病院を紹介してもらい早速インシュリン治療を始めた。インシュリンを使えば血糖値はさがすが、毎日の注射が必須である。下げ過ぎれば、低血糖状態になり生命の危険がある。管理が大変で、一度インシュリンをつかうと、後戻りできないと聞いていた。当初は即効性インシュリン注射を一日三回、持効性インシュリン注射を一日一回のペース、さすがに順調にA・I・C値は下がる。一ヶ月後には一〇・二、二ヶ月後には七・一、三ヶ月後には六・二を達成し無事に白内障の手術を実施した。

びつくりしたのは、注射を開始してから二ヶ月半後には、早くも一日三回の即効性インシュリンが中止され、持効性の一・一回のみとなったことである。お陰でとにかく楽になったが、内心本当に大丈夫なのか危惧していた。

そしてその持効性インシュリン注射さえも開始から四ヶ月後には、経過が良いので中止してみるという。そうになると、インシュリンの分泌を高める内服薬オングリザを一日一錠飲むだけである。予想外の展開で、もう全快したような気分になった。

そして更に二年後には、そのオングリザの内服さえも中止になった。それでもA・I・Cをほぼ基準内に保っている。想像さえしていなかったことであるが、おそらく高血糖値が慢性化する前だったのが幸いしたのだろう。

その点はラッキーであったが、糖尿病と格闘している最中、足のむくみと共に腎機能の指標値クレアチニン値が上昇し始め、危険水域の一・〇を越えてしまった。このまま上昇が続くと透析が必要となるが、血糖値が下がった効果もあってか今は〇・八を下回り安定している。幸運が続いていたが伏兵もいた。骨粗鬆症からくる背骨の圧迫骨折による腰痛で歩行が不自由になった。しかしこれも今では痛みも薄れ、家の中は歩行器で動き回っている。

そのような状況のなかで、家庭内における私の役割分担も大きく変わった。従来は庭の草刈り等に限定されていたが、食品等の買い出し、ごみ出し、食器洗いの役割が追加となった。時には掃除、洗濯も担当している。

オングリザは日本国内では七年前から使用されている。糖尿病予備群の私にとって、もし足腰が弱って「万歩

「計」方式に頼る血糖値コントロールが難しくなっても「オングリザ」がある。この安心感は何者にも代えがたい。

食器洗い

家事の特徴は、ほとんどが個人作業。結果さえ問題なければ、自己流でやれる。

まず食器洗い。洗剤を使わず、四二度の温水で洗う。どの程度、油分が取れたかの判定は触感が抜群に優れている。油の付着さえ触感で判るのだから、汚れ分の判定など、眼をつぶっていてもできる。

寒い時に温水を使うのは快適である。まるで「足湯」の代わりに「手湯」に浸かっている感じである。手足は末梢神経の多いところ、冷たいと血管が収縮し、無理に血行を高めるために血圧があがる。おそらく、身体がその感覚を良く知っていて喜ぶのであろう。足よりも手の方が心臓にちかい分だけ、「足湯」よりも「手湯」のほうが快いのであろう。

食器は温水で洗うと洗いカゴに重ねて入れる。普通ならそのまま放置して乾燥させるのであろうが、我が家は何故か食器類の枚数がかなり多いようで、無理して一度に入れると山盛りになる。そのため先に入れた食器が冷えてしまったところに、上の食器から垂れ墜ちる水滴で、また濡れてしまう。そうすると、数時間では乾燥しない

ので、布巾で拭くことになるが、丁寧に拭いても冷たい水滴がうっすらと表面を蔽っていて乾燥した感じがない。そのため、温水で洗ったら食器類の温度が下がらぬ内に、布巾でおおざっぱに水滴部をぬぐい取る。まだ温度の高い食器の表面の水分はあつと言う間に乾燥する。この作業結果はなんとも言えない快感である。その時、分厚く重い瀬戸物ほど冷えないので満足感がある。食器棚にしまっただけから更に乾燥しているようで気持ちが良い。

イタリアの小さな村

我が家の台所は対面キッチンでカウンター越しに食堂があり、その一番奥にテレビが置いてある。食器洗いの時は、ニュースかスポーツか旅行の番組に合わせておく。ちょっと距離があるので音も聞き取れないし、テロップも読めない。ただし、映像だけは何とか見れる。

一番よく見るのが「イタリアの小さな村」という番組である。そのことは『まんじ』145号(2017年)の「ベニシアのエッセイ」のなかでもちょっとふれた。私たち夫婦はシチリアを含めてイタリアを一ヶ月ほど見て廻ったので、多少の土地勘もあり、妻が最初にはまってしまった。そして、たまたま一緒に見ている内に、これは「イタリア人の生活哲学」を主題とした番組なのではないかと思うようになった。とにかく、千人位の「小さな村」の主

人公たちの語る言葉がどれも、折字であり詩なのである。

ところが昨年、イタリアがヨーロッパ最初、最大のコロナ震源地になり、日本からのスタッフが入国することなど不可能になってしまった。最初は再放送で、なんとか凌いでいたが、その内に素晴らしいアイデアが生まれた。十年ほど前に放映した人気番組を半分ほど紹介しながら、その後続版をイタリアのスタッフに依頼してつくり始めたのである。

画面にマスク姿が登場すれば最近の撮影だと判る。かつて私と同年配の七十才代だった主人公達、そしてその子供達や孫達が仕事を立派に受け継いでいる趣向の物語が多い。BS日本テレビの長寿番組で毎週土曜日の放送であるが、初回は二〇〇七年で、同一内容を二回繰り返し放映している。現在では作品としては三三七回である。その上、アンコール放送として日曜日にも放送している。それで延べ回数は一三〇〇回を超える。

緊急事態が生んだアイデアであろうが、制作費は大幅ダウンしているに違いないのに、時の流れや現地スタッフの視点が加わり、かえって成功しているように思う。コロナ禍を活かした番組だと評価している。

調理用鍋

食器洗い担当となり、鍋や釜もせつせと洗っている。

もともと金属屋なので、金属容器がさびついたり汚れていると気になる。内外面ともにピカピカにしてひとり悦に入っている。

煮物用の深鍋、味噌汁用鍋、牛乳沸かしなどは、もともと焦げ付くようなことはない。水分が充分にある間は、内面の温度は一〇〇度以上にはならないから当然である。問題となるのは大型の中華鍋である。外見から職人の手作りらしいのが判るが、鉄鍋ながらかなり高価なものようだ。内外面共に黒色に光っていて、見た目にはひどい焼き付きはない。しかし、表面を撫でてみると焼き付き部分の凹凸がよくわかる。エスケーターのベルトに手を触れていると下地が如何にゆがんでいるかわかるようなものである。点字を創出した盲目のルイ・ブライユは、幼い頃、絵本の印字の凹凸をなぞって文字の認識をしたという。網膜は皮膚の光感受性が高まったものと聞くと、触感も進化するものすごい。

中華鍋は全面黒色になっているので、張り切って磨くが、細かい番手のサンドペーパーでは作業がはかどらない。そのため硬質スポンジに＃二四〇、＃一二〇の砥粒をまぶした研磨プロックを買ってきて磨くと、やっとこびりついて黒くなっていた部分から「墨汁」がにじみ出てくる。

書道用の墨は、炭と黒鉛の中間的な材料で、微細な油煙を集めて固めたものであるが、かなり黒鉛に近い性質

をもつていて、硬くて熱伝導や電気伝導にすぐれ金属に近い。類似のカーボンブラックはゴムタイヤの強化材として重量で三割も混ぜられている。だから意外に墨の部分の研磨は手間がかかるが、凝り性なので内面だけで無く外面までキレイにみがき上げた。大きな中華なべも一見ステンレス製のような渋い光沢となり、黒く焼き付いたところはもちろん変色部分も全くない超高級品になった。使うのがもつたないほどの出来映えである。

ところが、実際の使用結果を見ると、どうも以前よりも焼き付きが多いようなのである。そして金属屋なので直ちに気がついた。裸の鉄よりも墨で表面を蔽った方が焼き付き防止にははるかに優れているのではないかと。

一般的に金属というものは、みかけとは異なり、極めて活性の高い材料で、もし表面に酸化保護皮膜を生成しなければ、周囲と激しく反応するのである。だから磨いてしまうと、金属の本性があらわれ、かえって調理材と反応してしまう場合もある。その点、薄く強固に付いた墨は鉄を守ってびくともしない。

その後、中華なべを使う料理人は、なべを拭くだけで決して磨かないと聞いた。しかし、折角磨き上げたので、焦げ付きが出るとまたせつせと磨いて誤魔化している。

実は中華鍋ばかりでなく、フライパンでも失敗した。フライパンはアルミニウム材にテフロン等のフッ素樹脂をコーティングして、油を敷かなくとも炒め物が付か

いようにしたものが多い。しかし、なにせ、樹脂なので強く磨くとすり減ってしまう。だからフッ素樹脂に人造ダイヤモンド粉を混ぜて強度を上げたり、接着面がはがれにくい様に表面に凹凸を付けた高級フライパンも出ているという。

それをステンレス鋼の金属たわしでごしごすったのだからいきなりアルミ面が露出してしまった。しっかりと油を敷かないと焼き付くし、使用後の洗浄も大変である。比較的安価なもので、取り替えれば良さそうなものだが、自業自得なので今でも頑張って磨いている。ついでに金属材料屋として、焦げ付かない鍋について原理をひとくさり。とにかく鍋の温度にムラを生じないように厚くすることである。厚くすれば直火の部分でも厚さ方向に熱を伝える間に、横方向にも熱がながれ均熱できる。そのため厚さ方向には熱が伝わり難く横方向にはよく熱が流れる複合材料(クラッド材)が鍋底には使われている場合が多い。

家にはSEMI(ストウブ)というフランス製の調理鍋もある。鑄鉄製で重さが四キログラムもある。底厚は五ミリほどであろうか、ホーロー加工により表面にガラス質の釉薬を高温で焼きつけてある。料理材の焼き付きがなく、珪瑯の接着も安定していて、均熱性や保温性に優れ、蓋も重いので圧力釜の要素もある。重いことを除けば、理想の調理器である。十九世紀末に発売され、いま日本

でも高級品扱いされている。

ついでに、お肉をうまく焼くには鉄板焼きが一番よいが、ある料理店で机台ほどの大きさの鉄板の厚さを聞いたら十二ミリと言われた。それなら私でも上手く焼けるにちがいない。

相模原高校前の道路拡幅

私の住む相模原市は、旧陸軍の造兵廠や士官学校、病院などを中心にして、相模原の丘陵地に昭和十二年に都市計画された軍都である。市街地の北部を東西に走る国道十六号線は巾四〇^一、それに直交する市役所通りも巾四〇^一であり東京都内の最大巾の昭和通りに等しい。中心市街地は、ほぼ東西四〇〇^一、南北二四〇^一のプロックに区切られ、その道路幅は大体二〇^一ほどあり、最小でも十一^一はある。

我が家の前の東西道路も、幹線道路でもないのに、プロック区割りに接し、車道七^一に両側二^一の歩道がついている。

そこから西五〇〇^一ほどのところに県立相模原高校、通称「県相」がある。地元での進学高であるが、私達が結婚して相模原にやってきたころは、周辺には何もなかった。「県相」の北面に通じる家の前の十一^一幅道路が途中から巾一^一ほどの草道に狭まっていったほどである。

「県相」の敷地はひとつのプロックの西半分を占め、南面を十八^一巾、北面と西面を十一^一巾の道路で囲まれている。この学校でお世話になった息子によると、創立当時、県の財政状況が厳しかったとかで、三階建ての校舎はみすばらしいと言うが、校庭や周回する道路は、歩道も整備され立派なものである。

昨年末のことであった。いつものように散歩していると、「県相」の正門の東面十一^一道路の拡巾工事の予告が出ていた。つい数年前に再舗装の工事が終わったばかりで、それほど交通量が多いわけでもないのにどうしたことであろうか。

新年明けに工事が始まった。まずは「県相」の周囲を蔽っていた樹木が次々と切り倒されている。拡巾の用地を「県相」が提供するらしい。丸見えになった白い校舎群は三階建てで中学校用のようにもみえるが、景色には良く調和している。正門横に駐車場の整備が進んでいるが、用地提供の代償なのであろうか。不可解なことで気になった。

歩道の幅が一・五^一から四・五^一に拡幅されるようである。そしてやっと工事が、自転車通学の安全対策だと気がついた。

そう言えば、相模原市内各地を散歩している時に、しばしば列をなして歩道を自転車で疾走する高校生群を見た。狭い歩道を併走している場合もあり、危険でノ

ンビリ散歩を楽しむような雰囲気ではない。

調べてみるまでもないが、相模原市内には電車通学の可能な高校などほとんどない。電車通学にしても、自宅から駅まで、あるいは駅から学校までは徒歩となるため、時間的な負担は自転車通学より大きくなるのである。事実、市内の中心地にある「県相」でさえ、最寄りの相模原駅から一・八^キ、徒歩二十五分、一時間に数本の相模線上溝駅からなら一・五^キ、徒歩二十分の距離である。市内の東部で比較的に入人口の多い小田急線沿線の住宅地から「県相」までは約八^キほどである。自転車通学なら三十分ほどの距離である。大多数の生徒達が雨の日でも風の日でも自転車通学となるのがむしろ自然なのである。「県相」の場合は、始業時間にあわせ千名弱の自転車通学者が正門に殺到するわけである。

散歩しながら、小さな疑問が解けて、ちよつと幸せな気分になった。しかし、歩道拡幅工事のきつかけに交通事故でもあったのかも知れない。今度はそれが気になった。

ファミレスの閉店

コロナ禍の影響で、我が家でも時々利用していた「パンのレストラン」が最初に閉店した。その後も半徑六〇〇^{メートル}以内にある大型外食店六軒の内、二軒が相次いで閉店している。いわば半数近くが既に閉店したことになる。

閉店が続くのは大型飲食店ばかりではない。もともとファミレス等の進出の中で、やつと持ちこたえていた個人飲食店が、後継者問題もあり、次々にシャッターを下ろしている。カラオケ店、新興ヘルスジムも壊滅状態である。それに反して、「家族葬」を対象とした「小規模葬祭場」がやたらに生まれている。

変化の激しいのは、スーパーや大型コンビニで、いまや「仕出し屋」となり、弁当売り場、総菜売場はどこでも活況を示している。肉類、魚類、野菜類で賞味期限の近づいた素材を調理して並べているようで、商売としては実に効率的である。従来の飲食店も、座して待つ訳にも行かずテイクアウトと称して、にわか弁当屋さんに変身している。その反面で、従来からの弁当屋さんが潰れている。まあ、めまぐるしい。

面白いことに、こんな状況下にあっても、近所に二軒新しく飲食店が開店した。ひとつはドロインのモニター操縦を楽しみながら、もうひとつもジオラマで模型電車を走らせながら食事も採れるアイディア店である。

コロナ禍がこのままずっと続くわけでもない。まったく旧に復することはなくとも、一定の需要が回復するのは確実なのである。ファミレスや旧来の飲食店が消え去る中、新規開店というのは「逆張り」であるが、出店には場所も選べるし、テナント料金も割安で済むだろう。

ちよつと応援したい気分になる。

秘すれば花 マスク美人

「非常事態宣言」発令中なので、流行にマスクを付けないと散歩もできない。出会う人達もおしゃれなマスクを着用していて、もう一種の風俗となっている。

我が家の周辺には、徒歩圏に十軒以上も郊外型スーパーがある。散歩で歩数を稼ぐため、妻の「買い物指示書」に基づき、遠近を問わず歩き廻っている。

店舗により若下の差はあるが、しっかりマスクを着用し、若い女性は髪型やお化粧まで揃えているところもある。一見みんな似ていて、個人の識別が困難になるかとも思ったが、慣れてくると目だけみるだけでもかなり判る。人間の識別能力というのはいしたものだと思う。

そこで思ったのは、おしゃれなマスクで、鼻、唇、頬など化粧の難しい部分を隠せば、残るのはチャームポイントの瞳、眉毛、髪などで、如何ようにも描けるではないか。さすれば、みんなマスク美人になる。

そもそも、世界の伝統的な女性の衣装は、その最も魅力的な部分を隠すものが多かった。

日本の着物は、身体の線にくびれをつくらない着付けを原則とし、バストの膨らみは帯で締め上げ、ウエストからヒップにかけてのくびれにはタオルで補い、いわば

寸胴型に仕上げる。韓国の韓服も、布でバストを締め付けて平らにして、そこから長くゆつたりしたチヨゴリ（スカート）でウエストとヒップを蔽い、丈の短いチヨゴリ（上着）を羽織る。いずれも女性の魅力的な部分を抑制して美を表現しているのである。

ヨーロッパでも、かつて男女ともにスカートをはいいた時代があったと聞くが、いまや男でスカートをはくのはスコットランドくらいである。しかし女性がズボンをはくまでには長時間を要した。やはり身体の線をあからさまに表現するのを避けたからであろう。

そして、イスラム教の聖典コーランは「美しい部分は隠せ」と命じている。これは、美しいところを抑制的に表現するというよりも、文字とおり、美しいところは人に見せぬよう蔽ってしまえというのであるから徹底している。

ヒジャブ（ヴェール）、ブルカ（全身を覆いかくすもの）、ニカブ（目だけ出して顔を隠すもの）、アバヤ（黒い長衣）、チャドル（一枚布で全身を覆うもの）など多様な衣装があるという。

面白いのは、日本には「秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず」（世阿弥）という言葉があり、コーランでも「美しい部分は隠せ」との言葉があることである。

世阿弥の言葉は「やたらに見せるな、見せなければ人は花と思う」と言う意味である。一方、コーランの言葉を「美しい部分は見せるな、秘すればみんな平等に美人」と読む

と面白い。一時期、小学校の徒競走で、みんなで手を繋いでゴールし「みんな一番」の方式が流行ったのを思い出す。乳房が目立たなくする お尻が目立たなくする 顔を蔽う これこそ女性の平等のためのアイデアだったのではなからうか。

いま総務省に対する東北新社の接待問題で、某内閣広報官がニュースに登場する。マスク姿をみて四十代前半の女性と誤っていたが、マスクを外した写真は六十才かかで見える。念のために確認したら六十才であった。やはり「マスク美人」はあると確信した。

日本の「Qアノン」

コロナ禍が始まる前は、週二回ほど都心に出かけていたが、現在はほとんどの会合が中止となり、月に一回あるかないかである。それにもない知人からのメール件数も激減した。会えなければ、むしろメールが増えそうなものなのに、かえって疎遠になる。

その中で、米大統領選挙の行われた昨年十一月三日からバイデン氏が正式に大統領に就任した今年一月二十日までの三ヶ月弱の間に、ある「知人」から三十二通のメールをうけとった。いずれも、一貫して「トランプが勝つ」と主張する内容で、その証拠や資料が添付さ

れている。

投票日のメールは「トランプ大統領の圧勝」を断言するもので、米国内にはトランプ支持を明言しないが、本音はトランプ支持者が多くいるとの内容であった。事実、開票が進むと、バイデン票は世論調査ほどには伸びなかったもので、なるほどと思った。

様相が変わるのは、主要メディアが「バイデン当確」を伝えたころからである。

「ニューヨークの元市長ジュリアーニ弁護士が、バイデン側の選挙不正を裁判に持ち込んだ」とか「元米空軍中將が、民主党とCIAの選挙結果操作する内幕を暴露した」とか「裁判所がペンシルベニア州に期日後に到着した投票用紙の別個の集計を指示した」とか「これは共和党と民主党の闘いを超えて、アメリカ本土を戦場とした米中戦争である」とか「中国共産党の壮大な陰謀だ」とか「トランプ陣営、押収のサーバーからデータ入手、選挙不正の根底から揺さぶる情報を解読した」とかまことにぎやかである。

最初の頃は知らなかったが、米国には極右でトランプを熱烈に支持する「Qアノン」という闇の団体があり、米国に巣食うディーブ・ステート（陰の政府・陰謀組織）と戦いながら「バイデンの選挙不正」を告発しているという。この辺までのメールは、論拠を確かめようもないので、ちらちら眺める程度であった。

しかしジョージア州でトランプ氏が再集計の結果にも敗れてからはますますエスカレートする。ジョージア州で負けたのは「予定の行動」であるとか、「トランプ氏を退任させるCNNの密録音」が流出したとか、「トーマス・マキナニー中将が、トランプ大統領に反乱法を発令し大規模な逮捕を開始するよう呼びかけた」とか、さらには「テキサス州が、ジョージア州、ミシガン州、ペンシルバニア州、ウイスコンシン州を連邦最高裁に提訴した」とか毎日のようにメールがくる。

更にはテキサス州の提訴が簡単に最高裁に却下されてしまうと「トランプは全て予想していて、デИБラス・テートを完全に排除するため、時間をかけて網を張っている」のだと強弁する。

更に十二月十四日バイデンの当選が確定してからも、「もうバイデンの芽がない」とか「八〇九割の確率でトランプが勝つ」とか「バイデンが少しずつ追い詰められている」とか主観的な主張が続く。

そして選挙結果が正式確定する連邦議会の一月六日が近づくと、「バイデンのウクライナでの汚職情報を公開して、関連する各国法務機関へ送付する」とか「バイデン家の銀行口座、通話記録について壊滅的な情報を公開する」とか、一段とボルテージがあがる。

しかし彼の期待とは異なり、バイデンの当選が連邦議会で確定してしまうと、こんどは「ペンス副大統領の

裏切り」と罵しりながら、「トランプは厳戒令を発令し、ヒラリーや下院議長のナンシー・ペロシ、イタリア大統領、ローマ教皇が逮捕された」とのニュースを流し始める。デИБラス・ステート（陰の政府）の本拠地はローマ教皇庁だという。

ここまでくると誰にでも流石にフエイク・ニュースであることは簡単に確認できる。

そしてバイデンの就任式の翌日一月二十一日、最後のメールが届いた。

「すみません。予想大外れでした」とのタイトルをつけて「皆さんは半信半疑だったかと思いますが、私は恥ずかしながら九十九パーセント確実と思っていました」とありやつと一段落した。

ここまで、必要以上にメールの経過を詳しく紹介してきた。それは、このようなオカルト信奉者が米国のみならず日本にもかなりの勢力を得ていたことを知ったからである。日本のこのようなグループを「Qアノン」になぞらえて「Jアノン」と言うが、マスコミで活躍中の著名人にもかなりの賛同者がいるとのこと。ヨーロッパにおける同様なニュースは目立たない。

明治の頃、地動説や進化論をいとも簡単に受け入れた日本人なので、オカルト的な「陰謀論」とは相容れないとおもっていたが、政治的に左右の立場どちらでもな

い「普通の日本人」を自認する人ほど、陰謀論を信じやすい傾向にあるとの解説もあった。もともと日本にも「オーム真理教サリン事件」があり、教育ある若者達が主力を担っていた。

「知人」は発想力が非常に優れている。しかし「エネルギー保存法則」さえ、簡単に無視してしまうようなエキセントリックな面もある。そう言えば、ノーベル賞に輝く世界的な科学者のなかにもオカルトにはまった例がいくつかあるという。天才の中には、執着心の強いアスペルガー的な傾向を持つ者が多い。いや、アスペルガー者でなければ、偉大な成果を得られないのかも知れない。

オリンピック…孫子の兵法

東京オリンピックはコロナに始まりコロナに終わりそのうである。この状況が続けば日本がどんなに上手く対応しても「負け戦」は仕方がないであろう。孫子の兵法で「三十六計逃げるにしかず」なのである。事実、日本の世論調査でも八割がオリンピックの中止か延期を望んでいる。逃げる、逃げる。逃げて逃げまくれ。

しかし日本には「勝算」が無くなった時に「玉碎」を美化した歴史も持っている。何が起るのであろうか。

二月十九日、菅首相はテレビの先進七国首脳協議で「人類が新型コロナウイルスに打ち勝った証し」としてオリンピックを開催する考えを重ねて表明し、会議は「日本の決意を支持する」との声明を出した。

何やら戦意高揚を叫んでいるようであるが、「コロナに打ち勝つ」とはどういう意味なのであろうか。

文脈から言えば、「コロナ感染を押しさえ込む」あるいは、「コロナの脅威にもめげず」とでもなるのであろうか。しかし何とも不可解な言葉である。

一年前の二月後半、中国発のコロナ禍が、韓国の大邱や横浜港のプリンススタイヤモンド号で大ブレイクした。当然、地理的に近い日本に対して世界から厳しい目が注がれた。はたして予定通りオリンピックを開催できるかと。

幸いだったことに、日本はコロナ禍の初期段階では、先進七ヶ国に劣らぬ好成绩を維持していた。しかしオリンピック主催国としては、感染者の増大をなんとしても避けなければならぬ。そのため、政府や東京都では、PCR検査を発症者等に絞り、80%近い「元気な感染者」は検査を後回しとしていた。その効果もあって、三月に入ってから数値上では良好な成績を維持していた。

状況が激変したのは日本を除く先進七ヶ国の方である。いきなり感染者数が一〜二桁も急増してしまっただけで、IOCも日本の責任を問うことなく「一年延期」

の決定をせざるを得なかった。ほっとしたのは日本で、やっとなPCR検査の「滞貨一掃」に向かうことになった。一日当たりのPCR検査が千件、五千件、二万件と急増、それにともなって、感染者数も百名、五百名、四千名と急増する。そしてオリンピック延期決定からわずか二週間後の四月七日には「緊急事態宣言」を発令する慌てぶりであった。

結果から見ると延期決定は正解であった。西欧諸国はオリンピックを予定していた七月まで新規感染者数が安定していたが、米国が大ブレイクした。米国一国だけでその他の先進六ヶ国合計の二十倍もの新規感染者を発生してしまつたのである。

米国が参加しないオリンピックなどあり得ない。それでは、今回は予定通りオリンピックを開催できるのであろうか。

そのためには理屈として、前回延期を決めた昨年三月のコロナ禍の状況よりも、今年の開催時には新規感染者数が改善されていなければならない。

表1に先進七ヶ国の新規感染者推移を示す。表中に強調文字で示したように、第一波のピークも第二波のピークも先進七ヶ国間でかなり良く同調している。現在、第二波から大幅に改善しつつあることもほぼ共通していて、平均では、ピークから三分の一まで下がっている。

大きな進展であるが、問題はその改善した状態でさえ

表1 先進7ヶ国のコロナ感染状況（人口10万人あたり週間単位で示す新規感染者数）

年	週間	主要な出来事	日本	英国	ドイツ	フランス	イタリヤ	米国	カナダ	平均
2020	2.24~3.01	コロナ初期状況	0.18	0.05	0.16	0.20	2.8	0.02	0.05	0.28
	3.02~3.22	延期(3.24)の直前	0.2	2.5	6.7	7.3	29	2.6	0.9	5.0
	3.23~3.29	延期(3.24)	0.5	18	50	36	64	30	12	28
	3.30~4.05		1.2	36	46	48	53	57	23	42
	4.06~4.12	1次緊急事態(4.7)	2.7	56	36	39	46	66	25	46
	4.13~4.26		2.6	51	19	23	36	62	30	40
	4.27~5.03		1.3	50	10	11	23	60	27	35
	5.04~5.10		0.7	49	7.7	12	15	54	30	32
	5.18~5.24	緊急事態解除(5.25)	0.2	25	5.1	3.9	7.5	48	19	25
	7.20~8.09	オリンピック予定	5.8	7.8	5.1	12	3.3	130	8.3	60
	9.28~10.4	GoToトラベル(10.1)	2.9	75	18	119	24	92	34	62
	11.2~11.8		4.7	237	154	510	368	223	69	209
12.28~1.3		19	511	155	143	169	439	131	284	
2021	1.04~1.10	2次緊急事態(1.08)	34	620	188	191	193	518	180	342
	1.18~1.24		30	386	120	249	143	376	108	250
	2.01~2.06		13	199	73	214	138	257	72	170
	2.15~2.21	G7首脳会議(2.19)	8	117	63	200	140	153	53	114
	2.22~3.07		5	79	59	290	184	131	55	114
	3.08~3.21		7	59	102	257	256	126	62	116
3.22~4.04	原稿提出後の追記	11	49	132	403	243	135	93	136	
4.05~4.09	直近	15	28	137	425	156	140	143	135	

強調文字で示した欄は第1次、第2次のピーク時

表2 ワクチン接種率と新規感染者減少率

有効接種率 α	新規感染者減少率 $B = 1 - (1 - \alpha)^2$
10%	19% 1.2分の1
20%	36% 1.6分の1
30%	51% 2分の1
40%	64% 2.8分の1
50%	75% 4分の1
60%	84% 6.3分の1
70%	91% 11分の1
80%	96% 25分の1
90%	99% 100分の1

に低減しなければならぬのに対しては、全く不十分である。ワクチン接種に過大な期待ができていないのは、世界で最も接種が進んでいるイスラエルの現状を見ても判る。

も、昨年延期を決めた頃の二十倍も新規感染者が発生していることである。

このまま改善が続けばよいが、第二波の低減もここに来て停滞気味である。唯一の希望はワクチン接種が始まったことであるが、オリンピック開催前ほどの程度まで接種完了するか、見通しははなはだ暗い。

例えば、最も豊富にワクチンを確保している米国でさえ年内に接種完了できるのは75%だと言っている。オリンピックまでに50%完了するのは容易ではないだろう。

先進七ヶ国の現在の平均有効接種率は15%以下でオリンピックまでに30%に達するのは容易でない。

一方、有効接種率(α)と感染低減率(β)の関係は、ほぼ表2のように計算できる。すなわち有効接種率30%なら新規感染者を二分の一に低減できるが、十分の一

有効接種率がほぼ50%に達しているが、未だに新規感染者低減の実績はやっと半減にすぎない。とても「コロナに打ち勝つ」ことなど不可能なのである。

そうなる、海外からのコロナを水際で徹底的に防止するしかないが、だからと言って、最初から海外観客を閉め出すのは愚策である。ここは、とにかく厳しい入国制限を提示し、その条件内で大々的に海外観客を誘致することを基本とすべきである。

まず原則として競技者、観客、観光客を問わず、入国者は「抗体維持者であるか、またはワクチン接種完了後二週間以上経過した者」とIOCに提示する。

そのことによって、ワクチン確保に苦慮している国では、競技者さえ送り出せなくなるかも知れないが、その解決はあくまでIOCの任と逃げよう。ついでに観客や観光客の分のコロナワクチンも極力確保して貰おう。

これらの条件によって、海外観客が大幅に減少し、ますます赤字が膨らむとしても、海外のコロナ禍のためだと日本は逃げる事が出来よう。

このように、逃げる、逃げるといっても、ただ逃げるのではなく、攻撃しながら逃げようと言うのである。

ここまで書いたところで、新任の橋本大会組織委員長が早々と「無観客での開催・再延期は考えてない」と声明したことを知った。

世論調査で国民の80%が望んでいる中止や延期を「考えていない」というのはどう見ても傲慢すぎる。

勝算がなくなつた時、かつて日本は「玉砕」を美化したことがあつた。

我らが同人・瀧沢中氏が昨年末出版した『人望論』に、インパール作戦で「申し訳の玉砕」を許さず見事な「殿軍」を勤めた宮崎繁三郎少将の話が紹介されている。殿軍の役割は、本隊の退却を助けるため、留まつては戦い、戦つては退却し、また留まつて戦う、最も困難な役割である。その作戦を最初から放棄するとは何事か。

「逃げる、逃げる」というのは、「退却のために戦え」ということでもある。日本側から中止や延期を申し出るかわりに、「ワクチンを確保しろ」といつてI O Cをゆさぶり、もし外国からの観客が不十分なら国内でも観客を動員するから「収入の上納を免除」しろと主張しよう。鼻先にニンジンをおくらせて「Go To オリピック」を進め評判の悪い「GO TO トラベル」の失点を挽回しよう。

三月三日、I O Cのバッハ会長は恩着せがましく「各国オリンピック委員会に、できればワクチン接種をして東京に来てほしいと要請している」と語つた。

「できれば接種をして来て欲しいと要請」とは何事か。日本から先制的に「未ワクチン接種者は競技者であつて

も入国不可」と通告しなかつたからなめられるのである。

I O Cは今回のオリンピックが、「開催」にしろ、「再延期」にしろ、「中止」にしろ、いずれにしても「負け戦」になることを知っている。逃げたいのである。

しかし、表1に示したように、日本の新規感染者は、先進七ヶ国の平均の二十分の一と断トツである。だからこそ、日本はいくらでも強く要求できる。そのことによりI O Cがオリンピックを中止せざるを得なくなつても日本が責任を問われることはない。やはり「逃げるにしかず」である。

本稿最初に、菅首相の「人類が新型コロナウイルスに打ち勝つた証し」の発言について違和感があると書いた。その違和感について、つぶやいている内に、こちらまでちよつとおかしくなりかけた。読み直すすと没にしたくなる。

そんなことをしている内に、青沼陽一郎という方が菅首相の国語力を痛烈に批判している記事に出会つた。

その記事によると菅首相の「人類が新型コロナウイルスに打ち勝つた証し」との表現は、英文の公式報告では「新型コロナウイルスに打ち勝つ世界の結末の証し」となつてゐるとのこと。外務官僚が勝手に書き直したらしい。おそらく菅首相はこの英文報告書を読んでいないだろうが。やつと、この稿も一緒に提出する気になつた。